狼さん@がんばりたい

葬炎

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

とあるいじめられっこの少年が思う。なんで自分はこんなにも不幸なのだと。そんな彼は不良などから逃げてやるという後ろ向きな決断をした直後、事故ってしまい銀色の狼に転生する。なんだかよくわかんないけど、のんびり行こう。／／／／／三人称と一人称を混ぜた感じで地の文多めの作品にするつもりです。

目次

プロローグ　1
第一　5
第二　13
第三　27
第四　35

プロローグ

『おい、早く買ってこいよ』
『金出してやってんだから優しいほうだろー？』
「えぇ……でもこれじゃ少し足りないよぅ……」
『そんくらいお前が出せよ。ほら、早く行け』
バキッと、なにかを殴りつける音が周辺に響き渡る。
「えうっ」
そこは路地裏のような場所で、二人の大柄な制服を着崩した男が一人の同じ制服を着た背が低い男を殴りつけていた。
殴られた衝撃で倒れた男はこれ以上殴られるのは嫌だと、震える足に力を入れフラフラと歩き出す。それを確認した二人の不良と思われる男は満足したように談笑を始めたようだ。
「くそう、くそう、なんで僕だけこんな目に……。いじめられるほうにも理由がある？あったとこで結局はいじめるほうが悪いんじゃないか……」
ぐちぐちと不満を口にしながらも男たちに言われた物を求めてコンビニに向かう。

「だいたいなんだよ。僕だって普通に高校生活をしようとしただけなのに『お前チビだからこれから俺たちのパシリな』って。今時小学生でもそんな理由でいじめたりなんてしないよ……。つまりあいつらの脳みそは小学生以下。僕は高校生だから我慢しなきゃ……」

小さな声でボソボソと悪口を言うことで自分の中で落とし所を着ける。それで少し気が晴れたのかさっきまでフラフラだった様子が嘘のように確りとした足取りとなった。

「そうだ……あいつらは餓鬼、僕は高校生という大人。少しくらい我慢してやっても……我慢……がまん……できるわけがないっ」

しかしそれも一瞬のこと、今度は道路の真ん中で下を向き足を止め、ギリリと歯を食いしばる。

なんだかんだ言って自分を納得させようとしても彼は高校生、いじめている男たちと同じ年代で同じ子どもなのは変わらないのだ。

「そうだ……今までずっと我慢してきたんだ……小学校も、中学校も、高校も……。だったらもう解放されていいじゃないか……」

喉の奥から絞り出すように声を出す。

それは今までずっと虐げられていた者の恨み、辛み、悲しみが詰まっていて、彼の目

元には涙が溜まっている。
そこで彼はなにかにハッ、と気づいたように顔が上を向いた。
「そうだ、ずっと我慢してきたんだからもう解放されていいんだ。だったらあのいじめてくる二人から――――」
それはなにかを決心した顔。
彼は理不尽な今に抵抗しようと決め、そして一歩踏み出すために――――
「――――逃げよう！」
逃げる決意をした。
今までずっといじめられる側だった彼が喧嘩なんて得意なわけがなく、なにがあっても、呼ばれても逃げ、殴られる前に逃げ、何事からも逃げるという選択をした。
それは前に進もうという決意なのか後ろ向きに逃げようという決意なのか、今は、これからも、誰もわからない。なぜなら――――
プブー！
「……えっ？」
音に反応した彼が向いた先にいたのは、自分に向かって爆走している一台のトラックだったのだから。
ガシャーン！

「ここは……一体？」

第一

「ここは……どこ？」

彼が気がつくと、そこは辺り一面が木で囲われた、まるで森の中のような人っ子一人いない場所だった。

どこだここ、さっきのトラックで自分は死んだんじゃ、という困惑をなんとか心の中に押しとどめ、なにをすればいいのかわからなく、とりあえず人を見つけようと動き出す。

「なに、なんなの……？　なんで僕だけこんなことになるの……？」

先ほどまでの不良たちのいじめによる理不尽、今の意味がわからない状況という二つの理不尽に侵された彼の心は決壊寸前で、今にも泣き出しそうだった。

それにさっきまでは混乱していてわかっていなかったようだが、自分の体が思うとおりに動かなくなっていることに気付く。四つん這いで、高校生なのに赤ちゃんのように惨めに四つ足で動かないといけないという現状にまた泣きそうになり、しかしそれ以上に――――怒りを抱いた。

「なんでっ……なんで僕だけなんだ！　なんで僕ばっか不幸なんだ!!　そんなのって、

ないよぅ……」

自らの不幸を嘆き、叫び、それでも変わらない今に気づき、彼は思い通りに動かない体を無理に動かし丸まろうとする。

そこで彼は気づいた。

「えっ、なにこれ……動物の、足？」

今だ怒りと悲しみでまともに働かない頭を必死に回し、現状を理解しようと目の前のモノを見つめる。

彼が丸まろうとして見えた自分の下半身にあったものは――銀色のような鮮やかで綺麗な色の毛で包まれた、まるで犬のような足だった。

「えっ……犬……？」

一瞬の間の後、彼は跳ね起きるかのようにバッと体を起き上がらせ、自分の足、四肢に力を入れ駆け出した。

今彼が求めているのは自分の顔、全体を観れる場所。すなわち――川や湖だった。

「はっ、はっ、僕が、犬!?」

認めたくない現実、しかしさっきまでの動かしにくかった体は今、今までの生の中で一番の最高速なんじゃないかと思うほど速く、力強い反動が足に返ってくる。

そのままごちゃごちゃと考える自分の頭をとりあえず目先の事実を確認することに

集中することで深く考えないようにし、しばらく走っていると川が見えてきた。
そこにすぐに辿り着き、バッと川に顔を近づけ、反射して見える自分の顔を確認すると、やはりと言うべきか。
「やっぱり……僕は犬？　になってる」
目つきが鋭く銀色の体毛が神々しく輝いてるように見える、体は子どもなのか小さいが犬のような姿だった。
「どういう……ことなのっ」
そこで彼の混乱は極みに達し、気づけば周りは夜になっていて、しかも、
「雨……か。僕の心情を表してるようだ……ははっ」
ポツリ、ポツリと水が降ってきて、今にも雨が降り出しそうだった。
それに彼は少し自虐するかのように乾いた笑みを浮かべると、動きたくない体を叱咤し雨風を凌げる場所を探しに歩き出す。
もう彼の目から涙が溢れ出ることはなかった。
そして彼が川の近くを離れ見えなくなったころにはザーザーと、滝のような土砂降りが森を襲っていた。

この森にきてからだいたい一週間

「くっ、やっぱ難しいよね」

彼は今の姿に慣れ、魚を取りにあの自分の顔を確認した川まで出向いていた。

その姿はあまりにも自然、まるで人間だった頃がなかったかのような、最初から自分がそうだったかのような振る舞いだった。

「ていっ……！　やった！獲れた！」

肉球のような手で罠なんて作れるはずもなく、当然素手（前足）でだ。

「よしこの魚をさばいて塩を振って……あっ」

笑顔でなにかを探すような素振りを見せた後、すぐなにかに気づき目が虚ろになる。

そう、彼は人間だった頃を忘れたわけでなく、当然最初からこのような姿だったわけでもない。

ただ彼は意味のわからない現状に理解ができなく、納得もできるわけがなく、しかし全てを諦めてしまったのだ。

一日目と二日目はずっと寝た。これが夢とかそんなものだと信じ、どれだけ眠たくな

くても自分の見つけた巨大樹に空いてた穴に入った先にある空洞の中でずっと寝ていた。死ぬまでこうしてようかなと思うくらいには寝ていようとしていた。

三日目、寝ていても外も自分も変わらないことに気づいた。人間には戻れないし、外はマンションが乱立していてどこ見ても人間がいたような場所ではなかった。それを認められず、その日はずっと不幸を嘆いていた。

四日目、飲まず食わずはさすがに飽食の時代を生きていた彼にはきつく、そとに出てあの川の水を飲みに行った。久しぶりに口にした水はとても美味しく、またそこに映る自分の姿を確認し涙が出た。その日はもう巨大樹の住処に帰り寝た。

五日目、彼は外の森の中を駆けてた。特に理由があったわけではなく、なんか走りたかった。走っていたらお腹がすいたので魚を食おうとするが手段が思い浮かず断念。ウサギのような動物は見かけたがさすがに現代人だった彼にはきつかった。

六日目、昨日走り回ったおかげで自分の走る速さ、障害物を避ける反射神経など、自分の犬の体のスペックが高いことに気づいた彼は素手で魚を獲ろうと奮闘する。が、予想以上に素早い魚の動きに翻弄されずぶ濡れになった後に帰宅。寝た。

そして今日、七日目。彼はなんと素手での漁に成功する。が、食べる方法が思いつかなく陸に上がったことによりビチビチと跳ねてる魚をどうするか考える。結果――

「ごめん……お腹が、すいてるんだ」

振り下ろされる手、動きを止めた魚を口に咥え頭のない状態で川を使い洗い、そのあと空腹の勢いに任せ一気飲みした。
この姿になってから始めて食べた魚は血なまぐさかった。
泣いた。

この姿になってから数年が経った。
前は滅多に見かけなかった自分以外の動物が今じゃ歩けばすぐ見つけれるようになって少しばかり驚いてる。しかし兎っぽい動物やら小鳥など自分が近づいても逃げるどころか擦り寄ってくるのは少しばかり野生というか警戒が足りない気がする。彼からしたら嬉しいのだがそれで生きていけるのかと心配になった一面だった。
前は魚一匹捕まえるのにも何時間と奮闘していたのが昔のことのように今は前足一振りで何匹も捕まえれるようになった。それに調理ができるようになった。鋭くなっ

た爪を使いさばくのだ。調理と言っても血抜きだけだが、これだけでも食いやすさはだいぶ変わる。

あと彼は大きくなった体を見て一つ疑問を覚える。

「これ……犬じゃなくて狼じゃね？」

川に映る自分の姿を見てぽつりとつぶやく。

銀色の体毛という異質さはあれど、その姿は昔博物館で見た絶滅したと言われる日本狼に似ている。気がする。

その場合彼は肉食であり今まで魚だけとたまに野草食べてるだけなのに大丈夫かと思うが、そもそも魚食べてる時点で普通ではないので深く考えないことにした。

「まぁ……いっか」

大きくなった自分の体を横たわらせ丸まる。ゲームやＰＣなんてないので走るか寝るしかやることはない。

すると、丸まった足の間に小さい動物たちが集まって一緒に寝る体制に入り、鳥などが近くによったり体の上に止まったりする。ここ数ヶ月はこんな感じで昼寝するのだ。

彼は今のこんな時間がたまらなく好きであり、今では完全に前向きになれてると言えるだろう。人間だったころを忘れたわけではないが、深く考えないことによって彼は今、現状に満足してる。

そして彼はまた夜になりそれぞれの住処に戻り、自分もあれからずっと泊まっている巨大樹に帰る。
明日もその先もきっと変わらないと漠然に思いながら。

昔、とある山にて銀色のかくも美しき獣がいた。
その獣は山の長であり、見た瞬間挫いてしまうような威圧感があったそうな。
しかしその獣、決して人や動物などを襲わず、むしろ自然の脅威や妖怪どもには果敢に立ち向かい山やそこから付近の村はずっと助けられてきていたのだ。
結果、その付近の村が発達し獣がいた山がどんどん削られていき、最後にはなくなったのはなんたる皮肉か……。
しかしかの狼を敬い神と崇め社が立ったのはせめてもの償いと言えようか。いや、結局は人間の身勝手か。
山がなくなった後この獣を見た者はいなかったという。

第二

さらに数十年が経った。

彼の体はかなりの巨体になっている。恐らく人間の時の身長の倍くらいの大きさにはなっているだろう。

「……ないわー」

ずっと通っていて姿形の変わらない川を鏡に見た自分の体躯の大きさに彼は呟く。こんなでかい狼見たことないし、いたら怖すぎる。

さすがにここまで時間が経つと彼は人間のころのことなんて心底どうでもよくなっていた。すでに人間だったころより長く生きてるし、性格ものんびりした生活だったせいかかなり能天気なものとなっていた。

話す相手はいないが、今は自分の周りに動物たちがいる。中には本物の狼など肉食も混じってはいるがこの山にいる限り必要以上の過ぎた横暴は許さない。と睨んでいたらあっさりこちらに服従してきたので問題ない。その時あまりのあっさりさに少し間抜けな顔を晒してしまったのは彼の秘密である。

それと彼は運動とついでに体を鍛えるために森、これはぐるっと一周してみると山だ

とわかった。山を駆けていると、一つ大きな発見をした。

――人間がいたのだ。

おそらく今まで自分の住処としていた巨大樹から反対側の斜面で見つけたあたり、そっちの麓に人がいっぱいいる町があるのだろうと一瞬歓喜したのだが、一つ妙なことに気づく。

服装が……古いな。

見つからないように彼は心の中で呟く。

みつけた人間は小さい女性、つまり少女だと思うのだが、獣の皮のような物を着ており現代人の布や科学繊維からは遠くかけ離れているものだった。

武器や護身用具などがないのは最近までこの山が草食の動物ばかりだったからだろうが、特に警戒もなく草を選んで毟っている様子はあまりにも不用心で、なんの関係もないこちらが心配になってくるほどだ。

久しぶりに人間が見れたことにより少し感動してしまったのかぼーっと立っていたら、少女が何気無くこちらにふいっと振り向き、

目が、合った。

「……～～～っ!?」

少女は慌ててたためか声にならない悲鳴を上げ、手に持った草を投げ捨て必死に山を

下っていく。そしてその先には――――巨大なムカデ。

「～～～～～!?!?」

そう、これもけっこう最近なのだが突然変異のような姿の凶暴な動物やら虫やらが増えてきたのだ。今目の前にいる大きな虫やら牙とか角とかが突出したり手足が多かったり色々と。

それを見かけると獣になってから敏感になった本能がサーチアンドデストロイと信号を出すのでそれに従い潰す。

女性の前に飛び出た彼の前足が勢いよくムカデの頭に当たる。すると大した抵抗もなかっとでも言うように足は振り抜かれ、その後に残ったのは巨大な前足の跡が残ったムカデの下半身だけだった。上半身はどこかに消し飛んでしまったようだ。ビクンビクンとまだ少し動いてる体の断面から緑色の体液が溢れ出る。もう彼は何度か同じようなことをしてるので巨大な生物やらを殺したりするのには慣れている。

しかし少女はそのようなスプラッターな場面に耐性がないのか、一瞬目を見張り硬直した後白目を剥きフラっと倒れてしまった。

流石に今は突然変異やら引っ越してきた肉食動物やらで危ない山中に昔の自分の同族を置いていけるわけもないので、彼は仕方なく服を噛み背中に放り投げて乗せ、落ちないように速度に気をつけながら麓に向かって走り出す。

目指すは山を降りきったその先ににあるだろう村。できれば原住民に気づかれないようにこっそり置いておきたいと思いつつもこの銀色で無駄にでかい目立つ体じゃ無理だろうなと確信していた。

ある村人が一言つぶやいた。

「なんだありゃあ」

遠目に見える自分たちが肉や草を調達しにいくための山から、銀色の玉のようなものが左右に揺れながら山を下っているのが見えた。

あそこは草食動物ばっかで安全に狩りや薬になる植物などが取れる場所としてこの村が代々ありがたやありがたや、と感謝されながら使っていた山だ。そこにその日は薬を作らせたら右に出る者はいないと言われるほどの少女が新しい薬の材料を探すために出て行ったはず。

一人村人のつぶやきを何人か反応したのか少しずつ人が集まっていく。

「あらなんじゃあ」

「綺麗じゃのう」

「いやしかし――――こっちに向かってきてないかえ？」

じーっと様子を見ているとついに銀色の楕円形に見える玉は山を下り切り、徐々に大きくなってくる。

そして銀色の玉がなんなのかと顔が詳しく見えてくるほど近づいた時――――村人たちは数秒硬直し、すぐに駆け出した。

「うわあああ！　化け物じゃー！！　化け物がこっちにくるぞー！！」

「村が壊されるー！！」

「おらぁこんな村嫌だー！！」

その言葉に誘われ残りの村人も全員顔を出し、皆逃げ始めた。

それはそうだろう。遠目に見ても巨大な体を持った、明らかに凶暴そうな顔をした獣がこっちに向かって猛然とした勢いで走ってきているのだから。

それぞれ今やっていたことを放り出し銀の獣とは反対側に全力で逃げて行くのであった。

「ううん」

そんな村の様子を人間のころに比べるととんでもなくよくなった視力で彼は見てい

た。

まぁ、そうなるよな。

そう思いながらも少し残念に思った彼はやはり人間だった頃の気持ちは捨て切れてないなと思い、別に捨てる必要があるわけじゃないしいっか。と自分の沈みかけてた気持ちを持ち直す。

「でもこのままじゃ、最悪この少女が……」

ふと彼は考える。

もしかしてこのまま少女を村に送ると少女が大変な目に会うんじゃないかと。

自分の姿は一見、というより普通に凶暴にしか見えず、それゆえに人間たちは怯え逃げていった。そんなとこにその凶暴な獣に乗せられた少女が無傷のまま村に帰ってきたら怪しまれるんじゃないかと。例えばその獣が化けた姿だーとかその化身だーとかなんて言われて、生きたまま括り付けて焼かれたり斬られたりするんじゃないかと（彼の中で昔の人の排他的行動のイメージ）。そんな懸念を彼は抱いていた。

それじゃどうすべきかと彼は一旦立ち止まり考える。

と、そこで丁度よく少女が起きてきた。

「ふぇっ……」

今の状況が理解できないのかキョロキョロと周囲の状況を確認するように目を向け

る。

右

左

後ろ

前

――――下

「……☆△ー○×＞＿／!?」

とりあえず錯乱しているのは傍目にも明らかだった。

少女は何事か叫ぶがピクリとも動かず――――訂正。ブルブル震えている状態で、それ以上は恐怖で動けない様子である。

彼はその姿に少し愉悦感を感じてしまったが断じてそんな趣味ではないので気を取り直して話しかけてみることにした。

『少女よ』

「っ!?」

『喚くな』

「……（ガタガタガタガタガタガタガタガタガタ）」

少しばかりさっきの叫び声が耳元でうるさかったことにイラっとしたので、彼は自分

の中でできるだけ加減した威圧と共に言葉を発する。声は何時ぞやか見たジブ○のあの大きな狼の声を真似た。つもりである。モ○かっこいい。

すると、声はピタッと止まったが震えは数倍強くなった。

それにも少しゾクっと感じてしまった彼は少しSの気質があるかもしれない。

『大人しくしろ。ぼｋ――――私はあの山を守る者。過度になにかしなければ私からもなにもしない』

「……」

少し少女の震えが治まった。僕ではかっこつかないので一人称は私としたようだ。

言葉が通じる相手だと思ったのか少女はまだ何か焦った様子ではあるものの、こちらが何を伝えようとしているのか考えているようである。せわしなく目線を右往左往させながらも気分を落ち着けるように胸に手を当て叫ぶのをこらえてるようだ。

『此度はあの山を荒らす者（大きなムカデ）の排除ついでに助けてやったが次はないと思え。ここから先は自分の足で帰るといい』

「……○×――…△？」

『……む』

適当にでっちあげた理由を言うとなにかを聞き返すように言葉を発しているのがわかる。しかし、何を言ってるか言葉が理解できない。

それもそうかと彼は考える。そもそも自分のような巨大な狼？　がいたり、あのムカデやら他凶暴な獣なり虫なり他よくわかんないのがいたりするこの世界が自分がいた地球とは限らないのだ。むしろそんなもの聞いたことないし異世界と考えるほうが自然だろう。

さてどうやって自分の意思を伝えようかと彼は悩み、一時の静寂がその場を支配した。

私はこれからどうなるんだろうか。

少女は考えていた。いつもと変わらぬ1日の始まりに新しさを求め、今まで自分だけでは行ったことの無い（というかまだ幼いので村の外に一人で出たことがない）山に一人で入ったことが運の尽きだったのだろうか。今はなぜか銀色に輝く不思議な毛並みの獣（おそらく肉食）に乗っかっている状態なのである。もしかしたら住処に連れて帰られゆっくりいたぶられながら食われるかもしれないと思うと殊更震えが激しくなってくるのが少女は自分ではっきりとわかっていた。

少女が入った山は村人たちには神聖化されてると言っても過言ではない、今まで豊か

な生活をしていく上での生命線で、凶暴な動植物のいない安全な山だ。最近は妖怪という物騒な生き物も付近で出てたが、かの山は変わらず草食しかいなく、それゆえに神が住む山と最近は噂されてたほどである。

だが、そんな安全のはずだった山は今日を持って危険、立ち入り禁止をやむえないほどの事態が起きた。大人の倍は大きさがありそうな凶暴な獣に、気持ち悪い、虫が巨大化したかのような妖怪までてきたのだから。

終わった。そう思った。長い間あの安全な山にお世話になり、命の危険とはあまり関係ないようなのんびりしたい村だったが、それゆえに妖怪や凶暴な生物と戦った者はあまりいなく、すぐさまこの山や少女のいや村は獣や妖怪たちに蹂躙されるだろう。

そう、思っていた。

『ｈｑ　」ｋｗ』

「っ!?」

『＄ｋ」＄＿』

「……（ガタガタガタガタガタガタガタガタ）」

なんて言われたかはわからない。しかしその言葉には押し潰されそうなほどの重圧が伴い、それだけで頭の中がグチャグチャになりそうな暴力となって少女を襲う。

知らずのうちに口から出ていた叫び声を、次一言でも漏らしたら咬み殺されると思う

ほど強烈に刻みつけられた脳の命令に従い必死に抑える。しかし震えは一層増した。
このままではこの化け物の機嫌を損ねて殺される――そう思った時。
『――――――――――――――――――――――――――――――――』
「……」
まるでなにか語りかけてきているようだった。
しかし何言ってるかは相変わらずわからない。混乱している頭の中なら尚更。しかし、獣の言葉には一つの想いが乗せられていて、そのイメージが自分の、村人たちには天才、鬼才と持て囃された頭の中にすっ、と入ってくる。
――かの山の中で様々な、今まで見たことないような生き物とも一緒に、穏やかな雰囲気で一緒に寝ているこの化け物の姿を。
こころなしか震えが少しずつ治まってきているのがわかる。この化け物、いや、獣はあの山を守っている……？
つまり、あの山に住むんじゃないかと言われてた神はもしかして……？
そこに思い至った時に少女は自分がとんだ勘違いをしていたことを思い知る。思い返せば、この獣を人に害する化け物と判断するにはおかしいことが多々ある。
最初に出会った山中では私を狙っていた。
――今思うと見守るような目だった。

妖怪百足と私を取り合ってた。
――純粋に妖怪から私を守ってくれた。
私を住処に運んで食べようとしている。
――今いるのはどう見ても山中ではなく山から村に続く道の上。
どこをどう見ても私になにかするではなく、守ろうとしてる行動にしか見えない。そう思うと今までの恐怖していたのが申し訳なく思い、今までの恐怖からくる震えではなく、見た目からくる恐怖に惑わされ自分の浅はかな考えで危険だ、化け物だと思ってしまった悲しさからくる震えとなっていた。
『――――――――――――――――――――――――――――――――――――』
「……なんと?」
『……』
相変わらず言葉がわからず、それに乗せられてこちらに直接語りかけてくるイメージに思わず聞き返してしまった。
妖怪を倒し、弱き者を助け、あるべき場所に帰らせる。広い山の中、それらを全て自分だけでやってる神の姿。
人知れず山を守ってきたその神様の姿はあまりにも孤独で、孤高だった。

はっと我に返る。

今神様は山を降りて村に向かう途中、山と村の中間あたりで立ち止まってる。なぜか。それは神様が山の神であるがゆえにこれ以上は山から離れられないんじゃないかと思い至ったのだ。

慌てて今までずっと座りっぱなしにしてしまった神様の背中から降りる。その背中はとても暖かく、心地よかったので少し残念と思ってしまったが、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

少女は背中から降りた後、なにも救ってくれたお礼が返せないと獣の目の前に立った時に気づく。それにあたふたしてると察したかのように、また一つのイメージが少女の中に流れ込んできた。

『　　』

「……？」

思わず首を傾げてしまう。

そのイメージは、かの山をなにか黒いものが覆い隠す様相。これは、どういう意味なのだろうか。妖怪なんてこの神様からしたら一蹴できるだろうし……

少女がその意味に気づくのはもうしばらく先のこととなる。そしてすぐ気付けなかったことをすぐ後悔することになるとはこの時微塵も考えていなかった――――

相手が言葉わからないことといいことに調子に乗って
『お前にサ〇が救えるか』
と言ったら
「……？」
と意味がわからないとでも言うように首を傾げられ死にたくなるほど恥ずかしい思いをした獣がそこにいた。

第三

謎の少女との出会いから更に十数年経った。しかし山は相変わらずそのままの姿で――というわけではなくなった。彼が住んでいる山には、詳しく言えば彼が住んでいる山の周りには少し変化が訪れている。

ある日のことだ。

「んー、今日も魚を捕りに行くかーーーーーな？」

いつも通り近くに流れる川に生息する魚っぽい魚類らしきなにか（干すと美味しい）を捕獲しに行こうと寝ぐらの巨大樹から這い出た時だった。

――山の周りを、白く巨大な壁が囲っていた。

「……ウォールマ〇アかな？」

そんなことを呟きしばらくぼーっとした後、現実逃避気味にいつも通りの日常に戻っていった。

――――回想終了。

意味わからないだって？俺だって意味わからないよ。と、山の主（笑）の某銀狼氏は言う。

その日の前日にはなにもない、いつも通りの山だったはずなのに、寝て起きた次の日にはいきなり巨大な壁で囲われていたのだからそうも言いたくなるのだろう。

だがしかし泣いても笑っても壁が消えることはない。泣いても笑ってもいないが。

壁が現れたのは今から数えて数週間前（今の今まで気のせいにならないかなーと現実逃避してた）、いきなり突然パッと現れたのだ。なんの兆候もなく。だがしかし彼はなんとなく察しがついていた。

（……あの綺麗な、まるでコンクリートのような見た目の懐かしすら感じる綺麗な壁は、どう考えても人間が作った、作るやつだよなあ）

そう、まるでその壁は、彼が前世で人間として生きていた頃は飽きるほど、３６０度どこ見回しても視界の端っこには絶対見えるくらいにいっぱい建ってたマンションとかと似たような色彩の感じがする壁なのだ。これを人造と言わず何造と言うのだろうか。

しかしこれは一つ、どころではなくいくつもの疑問が残ってしまう。

（……あるぇ～？　確か何年か前に行ったあの人里はこんな壁作れるほど文明が発達し

てたっけ～？　しかも一晩で俺に気づかれることなく。……はっ、もしかして俺はスタ○ドの攻撃を受けて!?　なわけないかー。いやー、人類の文明の発達ってーのは早いもんですなー）

しかし疑問はあれど彼の巨大な体に反してミニマムな脳みそは理解が追いつかなかったため考えることをやめた。

そして今日も答えが出なかった彼は、またいつも通りの日常に戻る。

まあどうせ壁が建造されたとこで山ん中は変わることなかんべ。と、甘い考えをしながら。

山の麓にある人里。

それは世界の水準で少し文明が遅れつつも普通の人里だった。そう、だった。

しかし一人の天才が産まれ、その後、天才によって神という存在が人里の中で認知された瞬間、爆発的な変化と文明開化が始まる。

まずは変化。これは天才の子を始めとして人里の様々な人間が異能力を発現するようになった。

ある者は１ｋｍほど先で物を落とした物を音を見聞きでき、ある者は異常なほど道具の使い方が上手くなり、ある者は半透明な壁のような物を発生させるなど多種多様であった。

それに一貫性はなく、また近い血縁でもなければ一人一種と言っていいほどにバラバラで有用な物ばかりだった。

それを村の人間は最初忌み嫌っていたが、事実と受け止めた瞬間それは人間にとって最高の武器となった。

まずは村全体を能力による壁で覆った。襲いかかってくるものだけ弾き返せるようなものを。似たような能力を持ったものと数人で。

そこらへんの妖怪や天災では覆せないほどの強度が確認されたら次に天才を始めとした道具を扱うことに秀でたもの、長年の作業により知識が豊富にある老人などによって効率化を推し進める。

素手――道具――果ては自動で動く絡繰り。

どこから出てくるのか天才がもたらす知識、未知の物質――未来では鉄などと呼ばれたりする鉱石や他様々な物を天才に指示された能力者が指示された通りに製錬し加

工していく。
その間にも人間は発展し増えていき、中には天災を自ら引き起こしたり時間空間という概念を歪める者すら出てきた。
最初は迫害されていたが力をつけ人類の、村の役に立つとわかった瞬間また一つの歯車となり動き出す。

それすらも取り込み更に、貪欲なまでに発展していく人間の姿はさながら――――全てを飲み込み尚も止まらない怪物のようだった。

「……こんなものかしらね」
それら全ての起点、始まりとなった天才の元少女は、全てが様変わりした村を、村の中心に建てられたタワー　――――通称監視塔から一望しつぶやく。
その瞳に映るは表面上は理想的な世界になった、ほとんどが人間がやらずとも自動で全てをやってくれるようになった村か、その村の外にある神の住むという伝説がある山か。
「……もう、私の手を完全に離れて独立した、してしまったこの村の人間たちはあの方の住む山をどうするつもりなのかしら」

監視塔と言われる所以は、この塔には村の全ての場所に死角なく設置されている監視カメラの映像が全部管理されている場所だからだ。塔の中心にある柱に設置されたコンソールを操作することにより村の中で起こってることでわからないことはない。

そのコンソールを操作するためのキーボードを叩きある映像を出そうとする。

――その情報を表示をする権限を持ち合わせておりません――

が、出るのはエラー表示。

「……やっぱりあの権力で腐った老害共がなんかしてるのね。作った私が権限無いって何よ」

ため息をつく音がキーボードを叩く音と共に他に誰もいない部屋に響く。

自分で作った物だしハッキングして無理やり情報提示させることは簡単だが、その後のなぜハッキングしたのかということを何時迄もネチネチと言及してくるのだ。故にあらゆる情報を引き出し全てを奪おうとするあの老害どもとは話したくない天才は諦める。

ハッキングの痕跡を残さず完璧に抜き取ることは簡単だ。それを製作者である天才以外に気づかれることはない。ではなぜ天才は老害共にバレることがわかるのか。

それは簡単だ。前に実際やってなぜかバレたのだ。

原因はわからないが恐らくは老害が囲いこんでいる能力者の一人の能力によって気づくのだろう。

そしてハッキングがバレたゆえに村に置ける自分の立場は低くなった。自分の私利私欲のために～～やら、個人情報を抜き出し～～などの話しを老害共は村の有力者の集まる会議で持ち出してきて、満場一致で格下げ、危うく最悪の犯罪者にまで仕立て上げられるとこだった。

リーダーとなり村の皆を統率し発展させていったのも今は昔。もう何百年も前のことだ。今は自分を蹴落とした老害どもがこの村のリーダーとなっている。

自分はおそらくこの村にはもう必要ないだろう。ならいっそあの山の、自分を救ってくれた神に全てを捧げようかと思った、その時だった。

自分の知らない間に打ち立てられた知らない計画によって彼の山が壁で囲われたのは。

嫌な予感がする。

なにかとんでもないことを自分が知らない間にしてしまったような嫌な予感が。

その予感はそう遠くない内に的中することになる。

だけど今はかんけｋどｚばｄｂ

ふぃｚばあおｄんｗくぉｓ

」，いˆ・あー＊・

「……村長。八意様の脳に仕組んでいた術式が破壊されました。まだ正気のようです」

「ほっほっほ。さすが八意様。いくら絶望させても心は全然壊れませぬな。このままでは洗脳が――――」

「やはり心の支えとなっているアノ神の住むとかいう伝説の山を壊すしかありませんね」

「そうですねえ……まだまだ私達のためには生きて、様々な便利な物を発明していただかなければ困るのですよ八意様」

暗い部屋に嗤い声が響く。

深く、深く、暗闇に誘い込むかのような嗤い声が。

第四

山を囲む巨大な壁の存在に気づいて（認めて）から更に数日経った。

今日も銀狼は朝日が昇ると同時に起き、いつの通りいつもの日常を繰り返そうと住処から一歩踏み出した、その時だった。

少しの違和感に気づく。

（……？）

まだ寝ぼけている頭で考えが上手くまとまらない状態なのか、頭を軽く振ったあと無視して川に向かおうとする素振りを見せたが、その違和感がなぜかどうしても気になるのか住処の入り口付近で立ち止まって目をつむり頭をしっかり起こそうとする。すると、

違和感の理由が把握できた。

（……生き物の数が減ってる？）

なぜそれが理解できたかはわからない。それは狼としての、獣としての勘が鋭いの

か、あるいは自分の知らないだけで特異な能力があるのか。ともかくとして狼は漠然と、しかし確信を持って山に住む動物たちの気配が減ってることに気づく。しかもそれは現在進行形で一つ、また一つと気配が減っていくのを感じていた。

（……っ!?　なんだ!?）

さらに銀狼は感じる。

――山が悲鳴をあげている。

生きてるわけではない、実際に悲鳴が振動となり鼓膜に響いて聞こえるわけでもない、だけど聞こえる。なんでだ。なんで。裏切るのか。そう言うような声にならない山の悲鳴が、銀狼には聞こえる。

――彼は駆け出した。

目的地は今も尚一つずつ命が消えて逝く場所。目的はこぼれ落ちる生命を一つでも掬い上げるために。

なぜ救いに行くか、それは使命感のような感情。それを原動力に猛然と駆けている銀狼の眼は、なにかを宿してるかのように――銀色に光り輝き残光を残す勢いで――

その輝きが残す銀色の軌跡は現状とは場違いなほど美しく、力強いモノであった。

遅かった……！

あまりにも気づくのが、何を思ってあんな所業に走ったのか、気づくのがあまりにも、遅すぎた……！

そう考えながらどこかへと向かって走る女性がいた。

髪の色は銀髪で服装は中心に縦線を入れ、そこから左右で色が違うという奇抜な格好をしつつ美人と言える女性だ。

そしてこれは今や女性本人しか知らないが、あの銀狼に子供の頃助けられた少女が大人になった者である。

その様相は必死で死に物狂いだった。
目の前の道を突き当たって左折、次の右に見える路地に入り込みその先にある金網に登ったら一軒家の屋根に乗って乗り越えて広場の土管の上に降り立ちそのままの勢いで転がりながら出口から出て真っ直ぐ行き出たら右。
そんなとんでもないルートを、目的地に着くまでの最短のルートを突っ走りながら向かう先は———山。
それは女性にとってはとても思い出深き山。かの神様と出会い、それが原因かはわからないが自分の住む村が今のような都市に発展する礎となる知識を得た原因と考えられる山。
そんな山が今、大勢多数の人類により壊されようとしていた。
（まさかこんな強行手段を取るだなんて……！　こんな時ばっか腰が軽くなりやがってあの老害共めぇ！）
女性としてその言葉遣いはどうなのかと指摘してくれるような人間はそこにいない。そもそも心の中に秘めたその罵倒に突っ込めるのは悟り妖怪ぐらいしかいないだろうが。
（確かにあの山は数十年前から開拓する案が出ていた。だけど一部神聖視してる老人たちや神の存在を信じる者、それと有力者で協力者である数人と私の反対があって抑えれ

ていたはず……！）

だがしかし今現実として今現在山は重火器と体全体を覆うアーマーで武装した者たちが山で生きる生き物を追討しているところだった。

（お父様はなにをしているの……！）

女性の父親は村の中の重役で軍部の最高責任者だった。

しかしこの時の彼女はまだ知らない。その父親や、山の開拓に反対していた有権者の多数は”集会中に少数の強硬派と共にクローンと言う人間もどきが暴走したことによる事故死”ということになっていることに。そして残った反対していた人間も急に手のひらを返すように開拓を推し進めようとしていることに。

それは反対意見によって滞っていたのが嘘のように一日で山の解体まで進めれるほど勢いを持っていた。

（……見えたっ！）

考え事をしながらも止まらない彼女の視界に入るは山の麓を囲うようにある巨大な壁に設置された一つの扉。

その入り口の扉を守るように立つ槍を持った者を視認した彼女はまっすぐその者のとこ向かい怒鳴るように声を荒げた。

「そこを通しなさい！　現場の責任者に話しがあるわ！」

「申し訳ありません。村長のほうから誰も通してはならぬと厳命されておりますので、例え貴方様でもお通しすることはできません」
「……くっ、いいからどきなさい！」
「なりません」
　門を守る門番を説得が通じぬと見て無理やり押し通ろうとすると、門番は翻すように手の平を扉のほうに向けた瞬間、透明な壁のようなものが唯一ある入り口の扉を覆った。
　門番は村を囲う結界を作っている中心人物の一人だったのである。
「正式に村長に許可をいただいてからもう一回きてください。大丈夫です、今日中に生物の駆逐は終わりますが山の解体はまだしばらく先になると思うので」
「私が心配してるのはそこじゃない……！」
　どうやら門番は彼女がそこまで急いでるのは薬師故に山に生息する薬草や他植物の管理とかを物申す為にきたとでも思ったのか、そんなことを言ってきた。
　だが当然彼女はそんなどうでもいいことを心配してるわけじゃない。
　扉に手を当てどうにかとできないかと考えている彼女は言う。
「あれだけ世話になってきた山を、神の住む山を、人間が私欲のために自然や生き物を蹂躙することがどれだけ愚かしいことかあなたはわかっているの!?」

「……」

「答えなさ――――うっ」

どさり、と倒れる音がする。

そこには倒れている彼女と、そんな彼女が立っていた場所、立っていたとしたら首の当たりの位置に黒い手持ちサイズの機械――――スタンガンを突き出す格好の門番がいた。

「……やはり八意様は村長が言ってた通り、神なんていう存在しない存在を信じ狂ってしまったのだろう。山の開拓は間違いなく人類の成長に繋がるというのに反対するなんて。一回病院に連れて行かねば。大丈夫、俺も最初自然を壊すのに少し抵抗を覚えてたけどあの医療用ポッドに入れば迷いなんてなくなるさ。大丈夫。そう、神なんていないんだ。大丈夫。人間以外の生物なんてどうなったって問題ない。大丈夫。人間生きてる中で一番偉いんだ。大丈夫。俺が一番偉いんだ。大丈ｂ夫。何ｗしたって人間だｋｋｋｒあいいｎｎｄあ。ｄいじょｂ。おｒえはにんげｎだっけ。だいじょうぶ。なにがだいじょうぶ。だいじょうぶ。おれってなんだっｋｋｋｋｋ」

意識が薄れる瞬間、早口言葉のように矢継ぎ早になにかを呟いてる門番と、山のほうからかつて会った神の遠吠えのようなものが聞こえた気がした。

――――それは地獄だった。
そう、銀狼は思った。
彼は命がある場所にたどり着いた。まだ狩られる前の、狩られている場所のすぐ近くにいる生命の元に。
そしてそこから見えた命が尽きて逝く光景は、
一匹のウサギが飛び出した。
人間が投げた銛のような棘に貫かれてもがきながら死んだ。
三匹のシカが逃げた。
銃のようなもので穿たれ動けなくなったとこでチェーンソーみたいなもので悲鳴を

響かせながら首を撥ねられた。
五匹のネズミが穴の中で震えていた。
穴に爆弾が投げ込まれ爆発と共に肉片が飛び散った。
もしそれが生きるための致し方無い殺害なら銀狼は眉をしかめるかもしれないが特に思うことはなかったかもしれない。あるいは自分のような凶暴な見た目だったりしたなら理解されないことを嘆きつつ諦めがついたかもしれない。
だがそれは違った。
生きるためでは無い。自衛のためでもない。
理由は知らない。だが元人間として予想はつく。
この山に住む生命は今――人間の欲望に侵され死んでいってるんだと。
それは自分が人間の頃だったらなにも思わず、あるいは可哀想とは思っても一時間後ぐらいには忘れることだろう。だが彼は今山に住む一つの命として山の危機に直面していた。
人間が山を侵略し始めたのだ。生命を根絶やしにし、あるいは一部だけ連れて行き、この山をなにかに利用するのだと。
生物の理から外れた行為だ。そう今の彼は思った。もしかしたら人口の増加で生きるための土地を増やすためかもしれないという可能性はあったが、なぜか彼にはそうと

しか思えなかった。
どういしようもなく、今の人間たちが行っていることが、
悲しいことだ。
愚かしいことだ。
許せないことだ。
そういった感情がごちゃまぜになり濁流となって銀狼の感情を巨大な渦となり巻き込んでいく。自分はこんな風に感じるような者だったかなんて考えれる冷静な部分はもはや存在しない。
そう、今の銀狼は、とても人間が――――憎かった。
故に次の生命の灯火が消えると同時に、銀狼の意識を抑えていた理性が
ぷっつんと
切れた。

――――ぐおおおおぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおんん!!――――
おぉぉぉおおおおおおん
おぉぉぉおおおおん
おぉぉん

お――――う

山を木霊する巨大な鳴き声が銀狼から発せられる。

山にとっては救いの、人類にとっては大いなる天罰の始まりだった。

とある場所。巨大な建造物――――監視塔の中にある一室で老人たちが声高々に談笑していた。

「いやはや。これでようやく我々のための、ひいては人類のための計画を次の段階に移すことができますな！」

「あはははは！　いやーここまで長かったですなあ。八意様はいかんとも御し難い部分がありましたから、これでようやく、今までより殊更人類のために役立ってくれるようになりましょうぞ」
「おやおや。酷いお方たちですこと。人類のため人類のため、果たしてそんなことを考えている方がこの中におりますかな。おほほほほ」
「おやこれまた手厳しい。婆様は人類のためのこの大経略に反対で？」
「まさか！　これでようやく私が追い求めていた永遠の美に一歩近づけるかと思うと、今から楽しみでたまりませぬわい」
「私はもっと完璧で完全なニンゲンを生み出す装置が欲しいですの。今のモドキどもはやはりどこか違和感ありましての」
「私はこの完璧で幸福な町をさらに完全にすべく、全住民の無意識を操れるような装置ですかねー」
　まるでそれは知り合いで集まって和気藹々となにげない話に花を咲かせるように、しかし内容は吐き気を催すような邪悪で醜悪な悪魔のような、どこまでも自分の願望や欲望を丸出しにした老人たち。
　それはもう自陣の勝利が確定してるかのような振る舞いだった。ゆえに油断していたのだろう。

「そろそろ前線の部隊から定時連絡がくるころでしょうか――――おや」
ピリリリリリ
「噂をすれば、ですな」
なんの躊躇いもなくその通信機のようなものを取ってしまったのは。
ガチャッ
「作戦は無事に進んでい【あおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん!!】……なんじゃ?」
その通信機に耳を当てれば聞こえてきたのは大音量の鳴き声。
咄嗟に耳を離したので特になにも問題は起きなかった。ように見えた。
「どうかしましたか――――さんや。なにやら獣の声が聞こえましたが」
「……」
「……、――――さん?」
電話を手に耳から離した状態のまま固まった老人を気にした老女が声をかける。しかし反応はない。
なにかあったのかと老女は立ち上がり近寄って肩を叩こうとした、その時だった。
「――――さんや、いたずらにしてはちょっと長いです
”ブオン!”
――――よ?」

なにか巨大な質量を持ったものが高速で振られたような、そんな音がしたかと思うと
老女はキミョウな光景を見た。
自分の――――首から上がなくなった体が高速で離れていく姿を。
「……やや？」
いや、離れてるのは自分だと。そう気付いたのは果たして意味があったのか。
ぐちゃっ
それを考えるには
この場にいた人間はみんな
首から上がなくなっていた。

あれはなんだ。
あれがニンゲンなのか。
あれが愛したイキモノの末路なのか。

実を与えたのが間違いだったのか。
知識を与えるのは間違いだったのか。
私が間違いだったのか。
だったら戻そう。
間違える前に戻そう。
最も愛する元ニンゲンに頼もう。
そして謝ろう。
お前の考えてた通りニンゲンは醜かったと――――

「――――はっ」
不思議な夢を見ていた。いや昼間だし寝たわけじゃないから白昼夢か。
そこにいたのは真っ裸の少女と人間だったころの自分。どうしても警察不可避な状況で二人は楽しそうに談話していた。気がする。
もっとも人間の頃の自分はいじめられっ子で人とまともに会話したことないしあん

な美少女と話したことも見たこともないしやはり夢か幻のようなものだったんだろう。
そう結論付けた銀狼は何事も無かったかのように住処に帰る。
地面に真っ赤な水溜りができ足が真っ赤に汚れてるのを欠片も気がついてないとでも言うように。
山を囲っていた壁がなくなっていても最初からなかったじゃないかと言うように。
さきほどまで自分が何を考えて行動したかなんて――――微塵も覚えてないと言うように。

この日、村の重役が軒並み死亡するという怪事件が起きた。
それは人が行ったにしては明らかな怪異、異常性を見せつけながら。
村の重役はその日会議をするために会議室に集まっていたのだが、全員が生きるために必要な、首から上がなくなったままの遺体が発見されたのだ。
現場はあまりにも異様な雰囲気を伴っていた。
まるで普通に話しているかのような、談笑をしている場面の写真を首から上だけ切り取ったように。
あまりにも静かでなにも違和感のない場面から首から上を編集して消したように。

唯一それ以外に変化があるのは一つの席に向かって歩いていたのか、そっちを向きながら倒れてる老女と、
その先にある、村長がいつも座ってる場所の空席と近くに落ちている通信機だけ。

このことに気づかれたのは事件から次の日であった。
その真相が判明されるのはまだちょっと先。
その日まで誰がやったのか、なにがどうなってるのかわからず数多のクローンが暴走し、集会に参加しなかった重役や何人かの能力者が血あらゆる穴から吹き出しながらうわ言を呟き死んだのはまた別の話し。
村は狂気と混沌に包まれていた。